

高機能自閉症児の自己理解の特性と他者との調整機能の関連

岐阜大学教育学部 小島道生

The relationships between self-understanding and mental negotiations in children with high-functioning autism

Faculty of Education, Gifu University, KOJIMA, Michio

要 約

本研究では、小学生の高機能自閉症児 37 名と、対照群として小学生 312 名を対象に、自己理解の特性を明らかにし、その特性が対人関係面にどのような影響を及ぼしているのか検証することを目的とした。まず研究 1 では、自己理解（自己の定義、自己評価など）と問題解決場面における自己と他者の調整機能について測定した。その結果、対照群に比べて高機能自閉症児の自己理解の低さが示されるとともに、問題解決場面では対象群とは異なり、「両方優先」の方略をあまり使用しないことが示された。さらに、高機能自閉症児の問題解決場面における自己と他者の調整機能に関して、行動観察を行った。その結果、自己理解の程度と調整機能について明確な傾向は認められなかった。これらのことから、高機能自閉症児の自己理解の程度と問題解決場面における自己と他者の調整機能については、関係があるとは言えない可能性が示唆された。

【キー・ワード】 高機能自閉症, 自己理解, 問題解決場面

Abstract

This study examined the relationships between self-understanding and mental negotiations in 37 children with high-functioning autism and 312 children with typical development. Participants were interviewed individually about their self-understanding (e.g., self-definition, self-evaluation) and mental negotiations between selves and others in problem solving situations. Compared to children with typical development, the participants with high-functioning autism found it more difficult to answer all the questions about self-understanding. The results suggested the level of self-understanding with children with high-functioning autism was not concerned about the benefits for both selves and others in problem solving situations.

【Key words】 high-functioning autism, self-understanding, problem solving situations

問題と目的

自閉症の診断基準である、①対人相互反応の障害、②コミュニケーションの障害、及び、③限局された行動や興味の範囲、という3つの特徴のうち、2つが社会行動の困難さに関連することから、自閉症は社会脳の発達障害であるということもできる(千住, 2012)。さまざまな社会脳の発達に関する研究の進展にともない、自閉症の対人関係面に関わる特性についても新たな知見が示されてきている。

そんな中、近年では自己が自閉症の障害の中核であるという指摘もされつつある。フリス(Frith, 2009)は、「空白の自己」と評し、それは心の盲目、弱い全体的統合、行動の制御メカニズムの変調、という3つの理論に影響を与えているとされている。これは、自閉症の症状を説明する3つの理論が、いずれも自己に深く関係していることを示している。これら3つの理論は、対人場面においては、他者理解(心の盲目)、文脈の理解(弱い全体的統合)、行動のコントロール(行動の制御メカニズムの変調)などに影響するものであり、自己を巡る問題が対人関係面にも多大な影響を及ぼすと予想される。

知的に遅れのない高機能自閉症児は通常学級に所属しており、生来の対人関係の障害から、他者とトラブルになりやすい。特に、自分と他者の意見が対立する問題解決場面においては、自己の欲求と他者の意見などについて調整を行うことに課題を抱えている。そのため、これまで高機能自閉症児を対象とした研究では、対人関係スキルの獲得支援を目指したソーシャルスキルトレーニングが数多く取り組まれてきた。国内外においても、高機能自閉症児等を対象としたソーシャルスキルトレーニングが示されてきている(例えば、Frankel & Wood, 2011)。

しかし、近年の心理学的な研究成果を踏まえると、単にスキル獲得支援だけでなく、障害の中核とされる自己と対人関係との関係性を解明することも必要になろう。ところが、これまで高機能自閉症児の自己理解と対人関係の関連性について検討した研究は極めて乏しく、その関係性については明らかになっていない。

そこで、本研究では高機能自閉症児を対象として自己理解の特性を明らかにし、その特性が自閉症の主症状とされる対人関係面にどのような影響を及ぼしているのか検証する。具体的には、まず研究1において、小学校などの友人関係で生じやすい問題解決場面における自己と他者の調整機能を心理学的な実験研究により検討する。そして、高機能自閉症児の自己理解と対人関係における特徴について明らかにする。

次に、研究2において高機能自閉症児を対象と自己と他者の意見が対立する問題解決場面における行動観察を実施し自己理解の特徴と問題解決場面での解決策について検討する。そして、高機能自閉症児の自己理解と対人関係面の特徴について明らかにするとともに、対人関係力を育む効果的な支援の在り方について検討する。

なお、本研究では知的に遅れのない小学校通常学級に在籍している自閉症を全ての対象とし、その中には広汎性発達障害、アスペルガー症候群も含む。

研究 1

目 的

自己と他者の意見が対立する仮設の問題解決場面を用いて、高機能自閉症児の自己理解及び他者との調整機能の特徴と両者の関係について、定型発達児との比較を通して明らかにする。

方 法

1. 対象児

高機能自閉症、広汎性発達障害、アスペルガー症候群の診断のある小学1年生～6年生 37名(男児 34名, 女児 3名)。全員が通常学級に在籍をしていた。小学1～3年生の低学年が 10名, 4～6年生の高学年が 27名であった。また、WISC-III及び WISC-IVが実施できた 31名の全検査 IQ の平均値は 98.5(SD:8.46)であった。知能検査が実施できなかった残りの 6名についても保護者からの報告などにより、全般的な知的発達については、遅れがないことが確認された。

さらに、ASA 旭出式社会適応スキル検査を用いて、社会適応スキルについても検討した。その結果、全検査スキルについては、「標準」に該当する者が 1名、「遅れ」に該当する者が 36名、「良好」に該当する者が 0名であった。

対照群として、小学1年生から6年生までの 312名が設定された。小学1年生が 37名, 小学2年生が 46名, 小学3年生が 59名, 小学4年生が 51名, 小学5年生が 59名, 小学6年生が 60名であった。

2. 調査内容と分析方法

- ①自己理解；先行研究 (Lee&Hobson, 1998) を参考に、小学校 4～6年生の対象児に対しては、自己の定義、自己の評価、自己の過去と未来、自己の関心など自分自身のことについて尋ねる 7つの質問を行い(例;「～さんの、いいところは、どこですか?」)、自己理解の測定を行った。小学1～3年生の対象児については、高学年の課題のうち5つの質問についてのみ実施した。
- ②他者との調整課題；問題解決場面における自己と他者の調整機能について検討するために、先行研究(鈴木・小島, 2012)を参考に作成し 4課題実施した。具体的な課題例は、表 1の通りである。なお、高機能自閉症児の一部対象者については 6課題を実施したが、分析には 4課題のみを用いた。問題解決場面における解決策については、先行研究(鈴木・小島, 2012)を参考に、「自己優先」(自分を優先する行動など)、「他者優先」(他者を優先する行動など)、「両方優先」(自分と他者を同じ程度に尊重している内容)、「その他」(どちらを優先しているか判断がつかない)、の 4分類を行う。

表 1 課題例(鈴木・小島, 2012)

-
- 1)休み時間になりました。あなたはいつもあそぶ友だちと一緒にいます。
 - 2)友だちは、かくれんぼがしたいと言いました。
 - 3)しかし、あなたはしたくありません。
 - 4)こんなとき、あなたはどうしますか。
-

結果と考察

1. 自己理解の特性について

まず、自己理解の量的な検討として、回答量について算出したところ表 2 の通りであった。高機能自閉症児では、37 名のうち 13 名(35.1%)は全てに回答ができていた。全てに回答できていた人数は、高学年 9 名、低学年 4 名であった。高機能自閉症児では、0 問の対象児も認められており、個人差が大きく認められていた。

表 2 自己理解の回答数

| | | 全て回答 | 1問未回答 | 2問未回答 | 3問以上未回答 |
|---------|-----|------------|------------|------------|------------|
| 高機能自閉症児 | 高学年 | 9名(33.3%) | 6名(22.2%) | 9名(33.3%) | 3名(11.1%) |
| | 低学年 | 4名(40.0%) | 3名(30.0%) | 2名(20.0%) | 1名(10.0%) |
| | 合計 | 13(35.1%) | 9(24.3%) | 11(29.7%) | 4(10.8%) |
| 定型発達児 | 高学年 | 94名(55.3%) | 31名(18.2%) | 23名(13.5%) | 22名(12.9%) |
| | 低学年 | 95名(66.9%) | 40名(28.2%) | 5名(3.5%) | 2名(1.4%) |
| | 合計 | 189(60.1%) | 71(22.8%) | 28(9.0%) | 24(7.7%) |

その一方、対照群では全てに回答できていた人数は 189 名で、60.1%の者が全ての質問に回答ができていた。したがって、自己理解の回答量については、高機能自閉症児の方がやや低いことが明らかとなった。広汎性発達障害者については、自己感の曖昧さといった点が指摘されてきた(佐藤・櫻井, 2010)が、本研究においても、高機能自閉症児は自己理解の低さが示され、自己理解の困難さを抱えている事例も認められると考えられる。

次に、回答数による人数の偏りについて検討するために、高機能自閉症児群と対照群について全問回答できた人数、1問未回答の人数、2問未回答の人数、3問以上未回答の人数について高学年と低学年に分けて、それぞれ人数の偏りについて χ^2 検定を実施し検討した。その結果、高機能自閉症児群の高学年及び低学年ともには有意でなかった($\chi^2(3)=3.67, ns$; $\chi^2(3)=2.00, ns$)。対照群についても、同様に χ^2 検定を実施したところ高学年で有意であり($\chi^2(3)=84.35, p<.01$)、全問回答がその他よりも多かった。低学年でも有意であり($\chi^2(3)=158.11, p<.01$)、全問回答、1問未回答、2問と3問以上未回答の順に人数が多かった。したがって、定型発達児では高学年及び低学年ともに全部回答

できる人数が多く、特に低学年では回答の多い順に人数が多くなっているといえよう。高機能自閉症児では高学年及び低学年に関係なく人数の偏りが認められなかったことから、自己理解の程度には個人差が大きく存在していると推察される。

2. 他者との調整課題について

問題解決場面における自己と他者の調整について、それぞれの質問項目ごとに解答を分類して検討した。その結果は、表3の通りである。

表3 問題解決場面における解決策

| | | 自己優先 | 他者優先 | 両方優先 | その他 |
|-----|---------|------------|------------|------------|----------|
| 項目1 | 高機能自閉症児 | 8(21.6%) | 21(56.8%) | 4(10.8%) | 4(10.8%) |
| | 定型発達児 | 90(28.8%) | 130(41.7%) | 76(24.4%) | 16(5.1%) |
| 項目2 | 高機能自閉症児 | 4(10.8%) | 25(67.6%) | 2(16.2%) | 6(16.2%) |
| | 定型発達児 | 85(27.2%) | 18(5.8%) | 194(62.2%) | 14(4.5%) |
| 項目3 | 高機能自閉症児 | 9(24.3%) | 15(40.5%) | 9(24.3%) | 4(10.8%) |
| | 定型発達児 | 85(27.2%) | 68(21.8%) | 148(47.4%) | 11(3.5%) |
| 項目4 | 高機能自閉症児 | 6(16.2%) | 25(67.6%) | 3(8.1%) | 3(8.1%) |
| | 定型発達児 | 176(56.4%) | 89(28.5%) | 18(5.8%) | 29(9.3%) |

質問項目1について人数の偏りを検討するために、 χ^2 検定を実施した。その結果、高機能自閉症児群では有意であった ($\chi^2(3)=21.05, p<.01$)。「他者優先」が「両方優先」及び「その他」よりも多かった。対照群でも、有意であった ($\chi^2(3)=85.85, p<.01$)。「他者優先」は「自己優先」「両方優先」よりも多く、「その他」は「自己優先」と「両方優先」よりも少なかった。

質問項目2についても同様に χ^2 検定を実施した。その結果、高機能自閉症児群では有意であった ($\chi^2(3)=36.62, p<.01$)。「他者優先」は「自己優先」「両方優先」「その他」のいずれよりも多かった。対照群でも有意であった ($\chi^2(3)=272.68, p<.01$)。「両方優先」「自己優先」は「他者優先」「その他」よりも多かった。

質問項目3についても同様に χ^2 検定を実施した。その結果、高機能自閉症児群では有意でなかった。対照群では有意であった ($\chi^2(3)=122.28, p<.01$)。「両方優先」、「自己優先」と「他者優先」、「その他」の順に多いことが明らかとなった。対照群では、有意であった ($\chi^2(3)=122.28, p<.01$)。「両方優先」、「自己優先」と「他者優先」、そして「その他」の順に多かった。

質問項目4についても同様に χ^2 検定を実施した。その結果、高機能自閉症児群では有意であった ($\chi^2(3)=36.41, p<.01$)。「他者優先」は「自己優先」「両方優先」「その他」よりも多いことが明らかとなった。対照群では、有意であった ($\chi^2(3)=201.62, p<.01$)。「自己優先」、「他者優先」、「その他」

と「両方優先」の順に多かった。

以上より、高機能自閉症児では問題解決場面において、どのような状況においても「他者優先」が多かったものの、対照群では質問項目 1 以外は「両方優先」や「自己優先」が多い場合も認められており、解決策が異なっているといえる。先行研究(鈴木・小島, 2012)においては、定型発達児よりも「自己優先」が認められ、「両方優先」という行動がとりにくい傾向が示されていた。本研究においては「自己優先」ではなく「他者優先」を多く用いていたが、「両方優先」を用いることが難しいことは一致していると考えられる。高機能自閉症児は相手や状況に関係なく、画一化した解決策を用いる傾向が強く、「両方優先」を用いることが困難であると推察される。このような結果になった背景には、本研究の高機能自閉症児は ASA 旭出式社会適応スキル検査の結果において、「遅れ」に該当する対象者が 37 名中 36 名 (97.3%) 認められており、こうした社会適応に関するスキルの乏しさが影響したとも推察される。

3. 自己理解と対人関係の関係について

高機能自閉症児 37 名のうち、自己理解の質問項目に全て回答のできていた 13 名と 4 問以下の回答であった対象者 4 名を対象として、問題解決場面の対応について質問項目 1～4 を合計して検討した。その結果、「他者優先」が 50%を超え、「自己優先」「両方優先」「その他」よりも多い傾向が認められていた。次に、4 問以下の対象者について割合を算出したところ「他者優先」が全体の 62.5%認められ、最も多かった。したがって、自己理解の程度と問題解決場面における対応について顕著な傾向は認められず、むしろ類似した傾向であると考えられる。

研究 2

目 的

高機能自閉症児の自己と他者の意見調整が必要となる活動での解決方法と自己理解の程度について、行動観察を通して明らかにする。

方 法

1. 対象児

高機能自閉症児 26 名について、4 名～6 名のグループで実施した。なお、グループ編成では小学 1～3 年生のグループと小学 4～6 年生のグループに分けられた。

26 名の対象ともに、全般的な知的発達に遅れは認められていない。また、ASA 旭出式社会適応スキル検査を用いて社会適応スキルについても検討した。その結果、全検査スキルについて全員が「遅れ」に該当すると判断された。

2. 調査方法

自己と他者の意見が一致しない可能性が高く、自己と他者の調整が必要になる話し合いの活動を約15分間、5グループに分けて2種類実施した。2種類の活動における問題解決場面について、「自己優先」「他者優先」「自分と他者両方優先」という解決策について分類し検討する。

3. 分析方法

活動の開始から終了までの時間をVTR録画した。そして、2つの活動で用いていた問題解決場面の解決策について、対象児ごとに「自己優先」「他者優先」「両方優先」の3つに分類を試みた。なお、一部グループについては、VTR録画できなかったため実験者が解決について記録を行った。

自己理解の影響の程度と解決策との関係について検討するために、対象児を研究1で実施した自己理解の程度に基づき高群と低群に分けて分析を行った。高群13名は、自己理解の項目に全て回答しているが、低群13名は1問以上未回答が含まれていた。

結果と考察

対象児を自己理解高群(13名)と低群(13名)にわけて、2種類の活動場面における解決策について集計を行った。その結果は、表4の通りである。 χ^2 検定の結果、課題1では高群において有意でなく($\chi^2(2)=2.92, ns$)、低群においても有意でなかった($\chi^2(2)=4.31, ns$)。課題2では、高群において有意でなく($\chi^2(2)=4.31, ns$)、低群においても有意でなかった($\chi^2(2)=3.85, ns$)。

以上のことから、高群と低群においてほぼ類似した傾向であると考えられる。したがって、高機能自閉症児の自己理解高群と低群で他者との意見調整において用いられる解決方法には、違いがないといえよう。高機能自閉症児の自己に関しては、心の盲目、弱い全体的統合、行動の制御メカニズムの変調、という3つの理論に影響を与えていることが示唆されている(Frith, 2009)。しかし、本研究の行動観察場面においては、高機能自閉症児の自己理解の程度と自己と他者の調整機能について直接的な影響は認められていない可能性が示唆された。

表4 自己理解高群と低群による行動観察場面における解決策

| | | 自己優先 | 他者優先 | 両方優先 |
|-----|----|----------|----------|----------|
| 活動1 | 高群 | 4(28.6%) | 7(53.8%) | 2(15.4%) |
| | 低群 | 5(38.5%) | 7(53.8%) | 1(7.7%) |
| 活動2 | 高群 | 5(38.5%) | 7(53.8%) | 1(7.7%) |
| | 低群 | 6(46.2%) | 6(46.2%) | 1(7.7%) |

総合考察及び今後の課題

本研究1と2を通して、高機能自閉症児の自己理解と問題解決場面での方略については、顕著な関係は認められなかった。このことは、高機能自閉症児の自己理解については、対人関係面における自己と他者の調整機能にそれほど影響を与えない可能性が示唆される。本研究では、自己理解という自己の認知的側面と解決スキルというスキル面の関係性について吟味したが、この両者については単純に関係しているとは言い難いと推察される。

解決スキルについては、研究1で示されたように、高機能自閉症は定型発達児に比べて明らかに「両方優先」を用いることが少なく、これは研究2においても顕著であった。定型発達者を対象とした先行研究(平井, 2000)では、問題が自分にとって深刻になればなるほど自己を優先するという問題の深刻さとの関係が指摘されていたが、高機能自閉症児においては、そのような問題の深刻さによって変化させることは認められないことが示唆された。したがって、高機能自閉症児は自己と他者の意見調整において、自分と他者の両方を考慮した対応方法を見いだすことが困難であり、どのような状況においても画一された対応方法をしがちであると推察される。こうした理由の背景には、本研究の高機能自閉症児において社会適応スキルの遅れがほとんどの対象者において認められおり、対人関係に関わるスキルの未熟さが影響したとも考えられる。

したがって、高機能自閉症児への対人関係面の支援を考える際には、自己と他者の意見が対立する場面では対応方法の選択肢の乏しさが対人関係面の困難さにつながっている場合もあることを考慮すべきであろう。既に多くのソーシャルスキル獲得支援プログラムが国内外で提供されているが、対人関係や仲間関係支援については、本人の獲得している選択肢を確認した上で支援の在り方について検討していくべきであろう。そして、スキルの選択肢が少なかった場合には、適切なスキルを複数伝えていくことを重視するような支援が求められる。

また、高機能自閉症児の自己理解は定型発達児に比べて低くなっていた。これは、高機能自閉症児を対象とした自己理解や自己概念に関する研究においても指摘されてきた。別府・野村(2005)は、高機能自閉症児の自己理解について発達的な変化を検討し、健常児と比較した場合に他者との関係で自己理解を行う者が少ないものの、小学生より中学生で他者との関係で自己理解を行う者が増加することを指摘している。高機能自閉症児の自己理解については定型発達児とは量的にも困難さがあるとともに、質的にも他者との関係から捉えることに課題があると推察される。ただし、高機能自閉症児においても発達的な変化が認められており、他者から自己を捉えるような支援を展開していくことが大切であるといえる。

今後の課題としては、自己理解と他者との調整機能との関係については、対象人数を増やして詳細な検討が必要であろう。本研究では、実験研究及び行動観察ともに明確な傾向は見いだされていないが、特に行動観察では比較的少人数であったことより、より人数を増やして再確認する必要がある。

次に、自己理解の程度と他者理解、さらには他者との調整機能の3つの関係について再検討する必要がある。先行研究(吉井・吉松, 2003)では、自己理解の能力が他者の心の理解と関係があることが示唆されている。したがって、自己理解—他者理解という認知的な側面と実際のスキルがどのよう

な関係にあるのか検証し、自己理解や他者理解という認知機能と対人関係面のスキルの関係について検討することで支援に向けて有益な知見が得られる可能性があると考えられる。

また、本研究では高機能自閉症児の問題解決場面における状況に応じたスキル発揮の乏しさが顕著であった。したがって、高機能自閉症児を対象として自己と他者の意見調整を行うスキル獲得支援の具体的な方法に関して検討していくことが求められよう。自己と他者の意見が対立する場面における解決スキルについては、コミュニケーションスキルなどとも関係すると考えられるが、多様なアプローチが存在するなかで、より効果的な方法について見いだしていくことが求められよう。

引用文献

- Frith, U.(2009) 新訂 自閉症の謎を解き明かす. 富田真紀・清水康夫・鈴木玲子(訳), 東京書籍, *Autism : Explaining the Enigma. Second Edition.*(2003) Blackwell Publishing .
- Frankel, F. & Wood, J.J.(2011)Social Skills Success for Students with Autism/Asperger's. Jossey-Bass.
- Lee, A. & Hobson, R.P.(1998)On developing self-concepts : A controlled study of children and adolescents with autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 39, 1131-1144.
- 平井美佳(2000)問題解決場面における自己と他者の調整. 教育心理学研究, 48(4), 462-472.
- 野村香代・別府 哲 (2005) 高機能自閉症児における自己概念の発達. 日本特殊教育学会第 43 回大会発表論文集, 406.
- 佐藤由宇・櫻井未央 (2010) 広汎性発達障害者の自伝に見られる自己の様相. 発達心理学研究, 21(2), 147-157.
- 千住 淳(2012)社会脳の発達. 東京大学出版会.
- 鈴木ゆかり・小島道生 (2012) 高機能広汎性発達障害児の問題解決場面における自己と他者の調整. 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学), 60(2), 139-146.
- 吉井秀樹・吉松靖文(2003)年長自閉性障害児の自己理解, 他者理解, 感情理解の関連性に関する研究. 特殊教育学研究, 41(2), 217-226.

